

本学教員執筆書籍の紹介

岡田 洋子・荃津 智子・井上由紀子・志賀加奈子 著

小児看護学 3 家族への系統的アプローチの実際

医歯薬出版 2006

宮 島 朝 子

少子高齢社会が急速に進展する中で、本来家族が果たしてきた役割や機能は低下し、さまざまな健康問題を抱える家族が増加している。わが国の看護界では、1990年代後半に家族看護学講座が設置されたのを皮切りに家族看護学に関連した書籍や雑誌が刊行され、1994年には家族看護学会が発足している。

2000年以降は家族看護に関する多くの書籍が刊行されている。その中には、家族看護学の理論・モデルの紹介や実践に向けたアセスメントスケールの活用法など、家族ケア・家族システムの視点から書かれたものがある。また、家族を対象として在宅・老年・精神など、各専門領域の視点からそのケアについて書かれたものがある。しかしながら、専門領域から家族ケアや家族システムについて書かれたものは見られないように思う。

このたび『小児看護学1』、『小児看護学2』に続くシリーズとして発刊された『小児看護学3 家族への系統的アプローチの実際』は、小児看護学の専門家の視点から“家族への系統的アプローチの実際を意図”して発刊された、貴重な専門書である。内容は以下の4章で構成されており、家族へのアプローチに必要な内容がわかりやすく整理されている。

＜第1章 「家族」とは—現代家族の特徴＞では、家族についてのさまざまな定義を紹介した上で、家族を取り巻く環境、家族形態、家族機能の変化を丁寧に概観している。次いで小児や家族が抱える健康問題を、“家族に起こっている現象”として取り上げている。小児看護学の見方が医学モデルとは異なることを実感させられるところである。

＜第2章 家族看護とは＞では、家族看護の発展の背景や目的、倫理的課題について述べている。短い章ではあるが、看護で、家族を1つの単位として取り上げることが必要な理由が的確に述べられており、家族看護に対する著者の視点の明確さが感じられる。

＜第3章 家族看護を支える理論的枠組み＞では、構造・機能的枠組み、家族発達論的枠組み、相互作用論的枠組み、ニード論的枠組みから家族をどのように

捉えるかを概説し、それぞれのアセスメントの視点を示している。また、家族システムの階層性に対するアセスメントを具体的に示すとともに、家族に焦点を当てた看護過程の特徴や、家族看護における看護職の役割について述べている。家族看護における看護職の役割は、見えるケアだけでなく見えないケアも多い。コーディネーター、継続的な役割など、ここで述べられている内容はそれをきちんと描き出している。専門職とはこういう仕事ができることだ、と納得させられる内容である。

＜第4章 家族看護の体系的・系統的アプローチの実際＞は、おそらく執筆者が最も力を入れて取り組んだ章であろう。提示された10事例は年齢、疾患、家族背景もさまざま、家族を多面的に捉えられる優れた内容になっている。各事例はまず理論枠組みからアセスメントし、家族システムから見た全体像を描き出し、家族・個人の健康問題を明確化して計画を立てるという構成になっている。子どもや家族が抱えている健康問題は多様であり、看護職には顕在的・潜在的な現象を見抜く力が求められる。小児看護の専門看護師も十数名登録されるようになったが、この領域に関しては、外来における役割が重要な位置を占めるように思う。カナダでは小児専門病院にナースマネージドクリニックがあり、ナースクリニシャンと言われる専門家が活躍していた。本事例で示された家族への系統的アプローチを読みながら、日本でも近い将来、看護専門職がクリニックを開設して活躍できる日が来ることを期待したい気持ちになった。

研究はその人の生き様が出ると言われる。書籍も同じではないかと思う。本書には岡田先生を筆頭に各執筆者の生き様、即ち一貫性のある思考、冷静な判断、視野の広さ、そして心から子どもを慈しむ人間味あふれる眼差し、があちこちから読み取れる。小児看護学の専門家による家族への系統的アプローチの実際を述べるにとどまらず、看護学の新たな発展を感じさせてくれる良書である。

(京都大学医学部保健学科看護学専攻)